緑陽（りょくよう）

RyokuYo
同友会ニュース
150号
2021年1月
発行

一般財団法人 同友会

藤沢湘南台病院
藤沢ケアセンター
藤沢訪問看護ステーション
居宅介護支援センター
長後いきいきサポートセンター
ライフメディカルフィットネス
ライフメディカル健診プラザ

一般財団法人 同友会「法人目標」

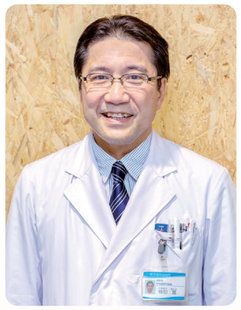
1. 24時間、迅速急性期医療と専門性を持つ医療の充実
2. 医療、保健、福祉における包括サービスの提供
3. 地域コミュニティ形成を目指す健康増進の推進
4. すべての職種に対する医療者としての教育、研修の場の確立

藤沢湘南台病院 「病院理念」

1. 信頼とやすらぎのある医療
2. 専門性と倫理観のある医療
3. 地域に貢献する医療

明けましておめでとうございます

◆2020年は新型コロナウイルスに振り回された1年◆



藤沢湘南台病院 副院長
熊切　寛

昨年1月初めに中国で原因不明の肺炎が報告されたと聞いた時、1月下旬に武漢の街がロックダウンされた衝撃的映像を見た時も、まだまるで映画を観ているようで別の国で起こっている他人事だった。2月15日に横浜港に停泊していたダイヤモンド・プリンセス号に医療支援で乗り込んだ時ですら、この未知のウイルスがここまで日本中に蔓延し我々の生活を激変させるとは想像もできなかった。

それからは2月下旬の全国小中高の臨時休校、3月の東京オリンピック延期発表、有名芸能人の死、4月の緊急事態宣言発令、マスク不足に対するアベノマスク支給、各地のライブハウスや病院、施設でのクラスター発生と毎日毎日新しい出来事が続いた。

6月頃に感染がいったん落ち着いたかと思われたものの、7月から再び感染者が増加し出現した第2波、秋になり感染者が減り、Ｇｏｔｏ政策などで少し経済が持ち直したかと思ったのも束の間、再度11月から日本中を襲っている第3波。とにかく一時も気が抜けず目まぐるしく情勢が変わる。

特に今直面している第3波は、高齢者の割合が多く重症化のリスクが高い、クラスターが多様化して行政の対応が難しいなどの特徴があり、この先どこまで感染が拡大するかまったく予想がつかない事態となっている。まさに2020年は新型コロナウイルスが猛威を奮った年と歴史上記憶される年になった。

これに対しメディアでは、政府は無策だ、首相はリーダーシップを取っていない、行政は対応が遅い、経済を回さないと自殺者が増える、現場は医師もナースも疲弊し医療崩壊だ、などなど様々な意見や批判が渦巻いている。ＰＣＲという極めて専門的な用語が一般の人でも簡単に使う言葉となったし、ＳＮＳでは様々な人が自分なりの主張を繰り返し、1億総コメンテーター時代とも言える様相を呈している。

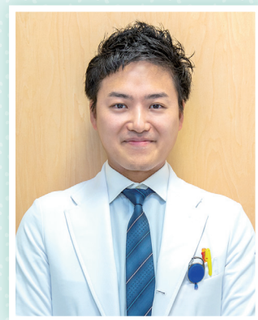
だが待ってほしい。批判するのは簡単だが今我々が直面しているのは、今まで誰も経験したことのない未知なる敵である。どう対処しどう戦略を練り、どんな武器を使いどう戦えばいいのか、誰もわからない強大なる敵である。日々増えていく感染者数、死亡者数、重症者数に怯え、海外のロックダウンの映像がいつ日本の現実となるか恐れおののく毎日である。三密を避けろ、マスクしろ、手を洗え、そんなことは十分にやっているのに感染はコントロール不能に陥っていて、もはや個人の努力に頼るステージは過ぎたと言われている。様々な知見を熟考した上で練り上げられた対策が成功するときもあれば失敗することもあるだろう。効果があるのかないのかさえはっきりしない開発されたばかりのワクチンに頼らざるを得ないのが現実である。東京オリンピックなどできるはずがないと誰もが心の片隅で感じている。

さて、コロナ禍の暗い世相の中、老若男女が鬼滅鬼滅と熱狂し日本中を席巻し、大ブームとなった「鬼滅の刃」。決して読んで明るく元気になる物語ではない。壮絶な戦いの末、鬼も死ぬが剣士も死ぬ。力の限りを尽くし戦うが勝つこともあれば負けることもある。大切な仲間を失うこともある。それでも戦う、必死に前に進む。そういう剣士の姿勢や言葉が我々日本人の琴線に触れ共感を呼び、胸を熱くさせている。

現在、我々はたくさんの不安を抱えているが、それでも前に進まなければならない。政府まかせ、行政まかせではなく、一人一人が能動的主体的に考え、この未知なる鬼と戦うしかないのではないか。誰もが危機と向かい合う当事者である。決して傍観者ではいられない。

新しい年が明るい未来に向かう一筋の光が見える年になることを祈りたい。

あけまして おめでとう ございます



一般財団法人同友会 副理事長
藤沢湘南台病院 副院長
鈴木　紳祐

昨年は、皆様にとっても、当法人にとっても大変な一年であったと思います。新型コロナウイルスによる未曾有の感染の蔓延で、普段気軽にできていたことができなくなってしまいました。

特に、昨年3月13日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく措置である緊急事態宣言が4月7日に発令されて状況は一変しました。学校は休校となり、アミューズメントパークをはじめ多くの娯楽施設は閉鎖しました。街からは人影が消えて、夜にはゴーストタウンのような光景も目の当たりにしました。そして世界中の人々が楽しみにしていたであろう東京オリンピックも延期となり、何か明るい話題を求める気持ちがあったのではないかと思います。そのような閉塞感に苛まれている中、家族想いの心優しい炭治郎（「鬼滅の刃」主人公）に日本が救われたのではないかと思います。

このような状況下において、当法人を支えてくださっている、家族のような存在である地域の皆様の役に立てているのだろうか。地域の皆様が、「近くに藤沢湘南台病院があって良かった」と思っていただけているのだろうか。ということを自問自答しながら、この一年職員間で話し合ってきました。役に立てている点もあるかとは思いますが、本当の意味で地域に欠かせない病院にはなれていないのではないかと感じています。今後は、より一層皆様の意見を真摯に反芻し、より良い医療を提供できるよう尽力いたします。

具体的には、どんな時も「お断りしない医療」を掲げて参ります。困った際には、いつでもご相談いただければ対応させていただきます。当院は幸いにも多くの診療科の医師や、経験豊富な看護師をはじめとするプロフェッショナル人材を多く有します。「つらいとき」「苦しいとき」「困ったとき」、我々が自分事として一緒に考えていきたいと思っています。

プロフェッショナル人材が在籍する診療科の一つにスポーツ整形外科があります。公認スポーツドクター、認定スポーツ医等の資格を持ち実績を上げ、知名度も高まり、企業ラグビー部のチームドクターを務めていることやオリンピック選手に同行したりしています。競技などで怪我をした選手が、希望して遠くヨーロッパからの来院実績もあります。

次に、私事ではありますが、昨年は当院が得意とするロボット支援下直腸切除術の技術を応用し、直腸脱で悩んでおられる患者様にもロボット手術を開始しました。海外では10年ほど前から開始されていますが、日本では当院のみで行っている手術方式のため、神奈川県、東京都だけでなく九州地方からもこの手術を希望して来院されます。まだまだ我々は成長途上の医療機関ですが地域の皆様に、常に最先端の医療を提供できるよう、今年も一年成長して参ります。

最後になりますが、湘南東部地域の地域医療の発展のために、職員一同精一杯頑張って参る所存です。どうか、引き続き皆様のご支援の程を何卒宜しくお願いいたします。今年一年が皆様にとって良い一年となりますことを祈念して、新年の挨拶とさせていただきます。

発行者：一般財団法人同友会（藤沢湘南台病院）　〒252-0802　藤沢市高倉 2345　TEL.0466-44-1451　URL：http://www.fj-shonandai.jp

HAPPY NEW YEAR ◆ 2021

新年座談会

with コロナ／afterコロナ時代の病院運営

渡辺　皆様、明けましておめでとうございます。座談会の司会進行を務めます渡辺です。宜しくお願いいたします。昨年は新型コロナウイルス（COVID-19）感染症により病院運営は大きく影響を受けました。現在置かれている環境や直面している問題を踏まえ、今後をどのように考えていくかを座談会として企画しました。それぞれの立場からご発言をお願いいたします。

最初に、鈴木理事長から感染症による影響の状況をお願いいたします。

鈴木　2020年2月、横浜港に停泊中の客船ダイヤモンドプリンセス号に乗船している乗客の新型コロナウイルス感染拡大がニュースで取り上げられたことにより、世間に危機感が一気に広まったと感じました。そして3月以降、政府や自治体から3密の回避や不要不急の外出自粛要請が出されたことにより、病院への受診が感染リスクを高めるのではとの不安から外来患者の受診が減少するとともに、救急車による搬送患者の減少も起こり始めました。感染リスクを考慮し手術や検査の中止や延期、術前のPCR検査の実施、入院患者への面会禁止などの対応も行ってきました。マスクを含むPPE（個人防護具）など、感染対策に必要な資材が不足する時期もありました。

ライフメディカル健診プラザでは、人間ドック、企業健診などが中止や延期となり、またライフメディカルフィットネスにおいては、感染を避け外出を控えたことによる会員の減少に加えて、4月に発令された緊急事態宣言の期間中は休館を余儀なくされました。

それらの結果、法人全体の収入が大きく減少し、厳しい経営状況が続いています。さらに、発熱外来やPCR検査対応のため、病院職員の負担増や感染への不安感も大きくなっています。

そして、4月には法人コロナウイルス対策本部を立ち上げ、病院内の感染対策委員会及び法人内各事業所と連携し、情報共有と意思決定を明確にしています。

山本　当初、新型コロナウイルスへの対応についての情報が錯綜状態で、職員も患者もそれに左右され、患者の受診抑制、発熱者への診療抑制が響き、病院の入院・外来患者は減少し、手術の控えも相まって、病院経営は非常に厳しい状態が続きました。夏頃から患者動向も回復しつつありますが、救急患者や外来患者は前年並みに戻っていないのが現状です。職員には不要不急の外出や外食の自粛を求め、秋からは全身麻酔予定の患者全てに術前PCR検査を行うようにし、院内でのクラスター発生には注意を払っています。

鈴木 紳一郎

藤井　同友会には急性期部門以外にも慢性期部門、健診部門、メディカルフィットネスなどがあります。これまで経験したことがないパンデミックの状況に対し、日々手探りで多くの対策を練り、これまで以上に各事業所が相互に助け合い、力を合わせて新型コロナウイルスと戦う体制が構築されてきたと感じています。

五十嵐　入院中の患者には、マスク着用と入院生活の行動制限をお願いしています。また、面会は許可制とさせて頂いておりますので、家族の方にはご不自由をおかけしております。制限の中でも安全で快適な入院生活を送って頂くよう、笑顔による声掛けは絶やしません。

看護職員につきましては体調管理、マスク着用、手洗いの励行、消毒薬の携帯を徹底させています。また、3密を絶対に避けるために、休憩室の利用方法や時間の調整もしました。さらに看護部内の計画的な研修は、人数制限をしたり開催を延期したりしてきました。その結果、人材育成への影響も出始めています。

次に看護学生の件ですが、年間6校の実習を受け入れています。今年は、実習期間や時間の短縮、実習病棟の選択、また実習生には実習開始2週間前は自粛生活をしてもらう等、大きな変化を余儀なくされました。

山本 裕司

渡辺　新型コロナウイルスの影響から、政府はオンライン診療を進める動きを加速させていますが、今後はどのような対応が求められますか。

鈴木　当院においても既に一部オンライン診療を始めています。現在は、時限的に初診でも認められていますが、受診歴の無い患者の場合には医療の安全性、信頼性を保つためどのようにしていくか難しい面もあります。オンライン診療は現場の医師と患者間の同意に基づき行われますが、今後は医師の判断に基づき、対面診療との併用になると思われます。しかし問題は山積しています。

進めるにあたっては、2022年度の診療報酬改定までに政府などで議論がされますので、その結果を踏まえ対応していきたいと考えています。

山本　診療の基本は現病歴、既往歴、家族歴の聴取と理学的所見の把握です。前3項目に関してはオンラインで十分ですが、所見に関しては視診、触診、聴診が基本で、触診、聴診はどうしても対面診療が必要になります。また、高齢者に関してはアクセスしにくいシステムと思われ、普及には時間がかかります。また、オンライン診療を更に進めるにはAIの活用が必要となりますが、それらを含めいろいろな規正緩和が今後必要になると感じています。

● 座談会の写真は撮影時のみマスクを外しています ●

藤井　真

生じているのでしょうか。

山本　「来るもの拒まず」の基本方針で診療を行い、働き方に変化はありません。しかし、新型コロナウイルス感染症疑いの患者を一般外来で診察できず、一般外来を行いつつ発熱外来を併設しなければいけないので、スタッフにかかる負担はどうしても多くなります。さらに疑いのある入院患者への対応にも負担がかかり、スタッフはストレスフルな毎日を送っていると思います。最近では唾液によるPCR検査が可能になり、負担は多少軽減していますが、行政への報告、患者への結果報告など仕事量は増えています。院内クラスター発生予防に職員全員が協力してくれていることに感謝しています。

五十嵐　職員は緊張の連続です。そ

五十嵐 絹子

渡辺　オンライン診療は、まだまだ課題が多く残るようです。次に、コロナ禍においても近隣医療機関との連携は欠かせないと思いますがいかがでしょうか。

藤井　地域医療構想並びに新型コロナウイルス対策神奈川モデルでの当院の位置づけを踏まえ、同友会の果たすべき役割を感染状況に応じて臨機応変に十分に果たし、地域の医療を支え、信頼を得ていきたいと考えております。近隣の病院、クリニックなどの医療機関はもちろん、周辺の介護施設なども含めた連携が大切だと思います。

渡辺　新型コロナウイルスの影響による感染予防対策やPCR検査対応など、医療従事者への業務の負担がかかっていますが、働き方に変化が

のため、家族をも巻き込んで日常の生活スタイルを変えざるを得ませんでした。手洗い、うがい、常にマスク着用、体温測定などの体調管理の徹底はもちろんですが、家族、知人との外出、会食の抑制が続いています。この状態が続き、心身ともに疲労していることは間違いありません。このような状況ですが、感染対策を講じながら「いざ」と言うときのために他部門と連携を図っています。

渡辺　最後に、afterコロナ時代を踏まえ、どのような病院運営の方向性が考えられるでしょうか。

鈴木　新型コロナウイルスは、非接触という社会変化をもたらしたことで、人とのつながりを保ちながらICT（通信技術を活用したコミュニケーション）の活用が進み、患者のQOL（生活の質）の変化とともに、地域包括ケアシステムも見直されていくと思います。ただ当法人が持つ7つの事業（病院、老健、訪問看護、居宅介護、地域包括、健康増進、健診）を生かし、医療の質の向上、介護・福祉サービスの充実、地域住民の健康維持を行うことに変わりはありません。

また、新型コロナウイルス感染症という未曽有の危機に対して迅速な対

渡辺 紳一郎

応が求められ、我々経営層が想定外の事象に対して、臨機応変な対応を行うための意思決定がスピード感をもってできるか否かが問われています。既に起こった事象に対して、正確な把握と改善策を具体化したBCP（業務継続計画）の修正も必要になります。

山本　厚生労働省の第7次医療計画では、5疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病及び精神疾患）、5事業（救急医療、災害時における医療、へき地の医療、周産期医療及び小児医療）の推進が計画されて現在進行中ですが、第8次医療計画では5事業に「新興感染症等の感染拡大時における医療」が加わり、5疾病6事業が基本計画として盛り込まれるようです。

今後、当院では2号館の再整備が行われると思いますが、病院を中心とした地域住民の健康維持を目的とした街づくりを目指すとともに、今回の経験をもとに、感染症に対する計画を盛り込んだ設計が必要となります。

藤井　本来、今後の10年間から20年間で段階的に起こっていくはずの変革が、世界中のさまざまな業種において一気にこの一年間で求められています。人々の価値観、生き方にも多大な影響を与えました。医療機関も例外ではありません。そんな中でスピード感をもって改革していくことが重要であると同時に、同友会本来の地域の人々を守り、職員も守っていく、そういう姿勢を貫き続けることもますます大切になっていくと考えます。

五十嵐　感染の拡大・蔓延の長期化により、社会全体が不安と閉塞感に包まれています。この一年、非接触という社会変化をもたらしましたが、看護は最前線で働く仕事がほとんどです。厳しい状況は続きますが、安心して治療・看護を受けていただけますように、看護部としては、人材確保と定着、個々の職員へのメンタルサポートをしつつ、地域の皆さまの期待に応えられるよう取り組んでいきたいと考えています。

渡辺　withコロナ、afterコロナ時代を乗り切るために新型コロナウイルス感染症へのリスクマネジメントもBCPの一環ですので、患者と職員の安心・安全を最優先に事業を継続できるよう、危機管理体制を見直さなければならないと痛感しました。継続して同友会の各事業所と連携・協力し、新型コロナウイルス感染症に対応していきたいと考えています。

今後、当院では2号館の再整備が行われると思いますが、病院を中心

以上で座談会を終了いたします。
本日は誠にありがとうございました。